

役場文書で見る発掘調査風景よもやま

昭和26(1951)年に設置された「大宰府の都制と文化調査会」は、大宰府史跡の本格的な調査研究のために九州大学・福岡県・文部省が協力して組織したもので、主に考古班・美術班・文献班に分かれて調査が進められました。中でも同年に考古班が九州大学の鏡山猛かがみやまたしを中心として行った地形実測調査は、戦後の大宰府における学術調査の嚆矢と言え、この成果を基礎に櫻杜境内や推定金光寺跡、松倉瓦窯跡などの発掘調査が行われていきました。

水城村役場の文書(旧社会教育課永年文書)には、「考古班調査計画に関して」と題されたペン書きの野紙一片があります。昭和26年6月9日



の日付印が押されたこの文書は、7月半ばから約1カ月間実施される実測調査に向け事前の打ち合わせ記録として作成されたものと思われる、調査班の寝食の手配や地元での承諾の取り付けなど、水城村側で準備すべき事項が記されています。調査には鏡山・日野開三郎ひのきざぶろうら教員の

他、夏休みを利用して九大の学生10人の参加が予定されており、宿泊場

所として「中学校静心亭」を提供、村役場が布団や蚊帳などの寝具を整え、1人1日150円と決められた食事の融通には地元の商店が応じたいらしいことがわかります。費用については調査会持ちだったとはいえ、長逗留となる若き調査隊十数人の受け入れはこの時期の村にとって大きなチャレンジの一つだったと想像されます。しかし同時に地元にとつてこの一大事件は、大宰府で今後展開される大調査を目の当たりにできるといふ、希代の体験の始まりでもありました。

県文化課が水城村教育委員会に宛てた昭和29年3月11日付の文書からは、当時学院中学校の生徒が発掘作業に参加していたことが分かります。生徒には、鏡山ら専門家に直接解説をもらうよう勧められており、うらやましいかぎりの学習の機会が発掘現場で設けられていたことがうかがえます。

【バックナンバーはこちら】

ページID 7241

大宰府市公文書館

藤田 理子